

【小田村四郎・本会会長の『日台共栄』巻頭言が台湾紙「自由時報」に掲載】

- 台湾の急務は「中国人意識」の一掃 -

2005年10月23日付の台湾紙「自由時報」が、本会機関誌『日台共栄』10月号に小田村四郎会長(前拓殖大学総長)が執筆した巻頭言「台湾はいつ日本と戦争したのか」を掲載しました。中国語の題名は、「日本は台湾の敵国ではない」、翻訳は本会常務理事で世界台湾同郷会副会長の林建良氏です。日本語の直訳ではなく、台湾の読者に分かりやすいように意識されているところがあることを申し添えます。(『日台共栄』編集部)

【巻頭言】台湾はいつ日本と戦争したのか

本会会長 小田村四郎

盧溝橋事件勃発記念日に当る七月七日、連戦国民党主席(当時)は談話を発表し、「抗日戦争」は「全国同胞の覚醒と奮起によるものであり、.....戦争を振り返ることで悲痛な歴史を知り、.....決してそれを忘れることはできない」と述べた。驚くべきことに陳水扁総統までが同日、中部地区での演習視察後の昼食会で、「今年は『抗戦勝利六十周年』に当る。我々はここに、敵と戦った軍のすべての英雄たちの犠牲的精神に対し、最高の敬意を表したい」と挨拶した。

この報道を見て、私は異様な違和感を覚えた。我々は蒋介石率ある国民政府と戦火を交へたが、台湾国民と戦争した覚えはない。否、台湾島民こそ我々と同じ日本国民同胞として共に敵と戦った「戦友」だつた。不幸にして散華された約二万八千柱の台湾英霊は、内地人戦死者と等しく靖國神社に合祀され、日本国民は日夜感謝の祈りを捧げてゐる。

にも拘らず連戦氏はシナ大陸人民を「同胞」と呼び、台湾人の敵だつた国の戦争を自国の歴史と称し、陳水扁総統までがこれに同調する。

台湾が独立主権国家であることは厳然たる客観的事実である。しかし台湾国民自身が自国の版図をどう考へてゐるのだろうか。もし四百余州、蒙古、西藏まで領土だといふのなら、日本を含めて全世界が相手にしないだらう。李登輝前総統が「新台湾人」を主唱し、「正名運動」を主宰し、「台湾人のアイデンティティ」確立を叫ばれることに耳を傾けて欲しい。

このやうな台湾人の独立意識の曖昧さこそ台湾併呑を狙う中共の思ふ壺である。石平氏が「動き出した『大陸・台湾反日同盟』の仕掛け人」(「正論」十月号)で警告された通り、胡錦濤は九月三日、人民大会堂で国民党の抗日戦での功績を高く評価したといふ(九・一九産経)。「中国人意識」の亡霊を一掃することこそ台湾の急務と思ふ。

日本不是台湾的敵国

前拓殖大学総長 小田村四郎

(原文日文、中文翻訳 林建良)

七月七日盧溝橋事件記念日、連戦国民党党主席(当時)発表声明説、「抗日戦争讓全国同胞覚醒奮発、我們絶対不能忘記」。採取與中国同様の「抗日」論調の連戦、讓我更清楚何以他自称是「純種的中国人」。

而讓我大吃一驚的是連陳水扁総統也在同日視察中部地区的演習之後説、「今年是『抗戦勝利六十周年』、我們要向與敵軍戰鬥過的英雄們表達最高的敬意」。看了這個報導、讓我有非常異樣的感觉。日本の確與蒋介石の国民政

府交戰過、但日本在二次大戰時並沒有與台灣戰爭過。更精確地說、當時的台灣人與日本人同為日本的國民、是同胞也是一同與敵軍作戰的戰友。當時不幸戰亡二萬八千的台灣英靈與日本內地的戰亡者同樣、被奉祀在靖國神社、日本國民對其深深感謝並日夜祭拜。

連戰將中國人稱為「同胞」、把中國的歷史当做自己的歷史、是企圖把台灣当做中國一部分、以正當化中國併吞台灣。而居然陳水扁總統也發此論調、身為台灣的国家領導者、此等歷史認識的錯亂令人不解。

台灣是獨立主權的国家、這是個嚴然的客觀事實。但是台灣國民自己有沒有想過自國版圖到何處？如仍公稱包括中國、蒙古、西藏都是所謂「中華民國」的版圖、那麼包括日本的國際社會都會對台灣不屑一顧。李登輝前總統提倡「新台灣人」的觀念、並推動「正名運動」、期望以此確立台灣人主體意識的努力、陳水扁總統是不是多少也要配合一下、並謙虛地聽聽這些正論。

台灣人的獨立意識曖昧而不清楚、讓全世界分不出台灣與中國到底有何不同？而這種曖昧的態度却也助長了中國企圖併吞台灣的野心。在日中國人石平所寫的論文「推動『中國·台灣反日同盟』的黑手」(「正論」十月號)已有所警告、胡錦濤於九月三日在人民大會堂讚揚國民黨抗日戰爭的功績、正是「國共同盟、反台反日」的一環。

台灣要確保自己的主權獨立、最重要的的要務是是不是應該先一掃台灣國內的「中國人意識」的亡靈？